

児童健全育成賞（数納賞）

子ども達の笑顔のために繋ぐ想い・繋げる未来

—「みらいる」を子育て支援拠点施設に—

北海道中標津町

中標津町児童センター「みらいる」 児童厚生員 大久保 さくら

はじめに

中標津町は、酪農を基幹産業とする人口2万3千人の小さな町である。

大型の商店などの参入もあり、就労場所の増加や転勤などにより、転入者も多い。核家族世帯での子育ても増加している。

町内には4つの小学校があり、各校区内に役場子育て支援室（以下「支援室」と略記）が主管する児童館又は児童センターが1館ずつ配置され、放課後児童クラブが併設されている。中標津町の児童館は子育てと地域ネットワークの拠点として位置づけられ、地域に根ざした取り組みを展開している。平成27年5月に開館した「中標津町児童センターみらいる」（以下「みらいる」）においては、乳幼児から高校生まで（乳幼児は保護者同伴）の居場所として、更なる子育て支援事業の役割が期待されるようになった。その背景には、行政における児童館改革が大きく影響している。この改革は、平成12年に福祉課の子育て支援担当となった前子育て支援室長（現民生部部長、以下「前室長」）が、ネグレクトの虐待ケースと出会ったことがきっかけとなって進められた。その関わりの中で生まれた「中標津町から不幸な子どもをつくらない・つくらせない」の理念は、今もなお児童館の職員全員に受け継がれている。

この実践報告では、中標津町の児童館の理念が生まれた経緯と、児童館改革によって子ども

達の問題に多様な形で支援が出来るようになった過程を辿ってみた。そして、迷い悩みながらもその理念に支えられることで方向を見失わず進み続けられたことを実感している私自身の児童館職員としての歩みも振り返ってみた。併せて、現在勤務している「みらいる」の活動と今後の可能性について報告したいと思う。

なお、事例については個人が特定されないよう匿名とし、情報の記述もプライバシー保護に配慮した。

第1章 はじまりの物語 ～私の知らない時間～

中標津町子育て支援・虐待防止ネットワーク設立

平成12年、福祉課児童福祉係に子育て支援担当と子育て支援・要保護児童対策に関する相談窓口が設置された。その相談窓口への虐待の通告に取り組んだのが前室長だった。このケースへの取り組みを通して前室長は、「中標津町から不幸な子どもをつくらない・つくらせない」という強い想いと「役場職員という立場でみんなと連携することによって、虐待を一件でも多く減らすことが出来るのではないかと考えたという^(注1)。この前室長の体験と思いが当時町民生活部・福祉課全体の課題になってきていた子育て支援策の充実、虐待通告の増大への対応の必要と結びついて、子育て支援虐待防止ネットワークの設立（平成14年）に結実していっ

た。この子育て支援虐待防止ネットワークは、平成18年から事務局が福祉課から新設された「子育て支援室」に移り、「要保護児童対策地域協議会」として位置づけがされた。

そして、支援室がコーディネーターとなり、学校・病院・児童相談所・警察など各関係機関と連携し、虐待家庭の支援体制が組まれた。児童館もネットワークの構成員となり、児童館の特徴を活かし虐待予防と早期発見と共に、受け入れ等直接的支援を担当している。また児童が措置解除後に家庭に戻る時には、再発防止の観点からも引き続き見守りが必要となるため、児童相談所と連携し児童が児童館に通うことを条件に家庭に戻ってくる場合もある。

児童館行政改革のはじまり

中標津町の児童館は、当初教育委員会青少年教育係の所管だった。当時の児童館は、放課後の小学生の利用が中心であり、児童クラブの利用は5時までで昼の利用はなかった。

前室長は、最初に対応した虐待通告のケースの体験から「虐待を世代間連鎖させないよう、子ども達やその家庭を見守っていくためには、身近で、子どもと直接触れ合うことのできる人の支援が絶対必要」と思ったという。そして、「予防も含めて子育て家庭と児童を見守り、つないでいく役目が児童福祉施設としての児童館に課せられている」と考え、当時関係部局によって設けられていた子育て支援センター設置検討委員会に提起した^(注2)。

平成13年、子育て支援センター設置検討委員会は、児童館を子育て拠点施設と決定し、平成14年には、児童館を子どもの成長を「線で繋ぎ見守る」ための拠点施設として、子育て支援を担当する福祉課への所管替えが行われた。

拠点施設として位置づけられた児童館だったが、厚生員のほとんどは嘱託職員であり、限られた時間の中で打ち合わせも十分にできない状況であった。

そこで、厚生員を常勤嘱託職員にして勤務時間を確保し、報酬の増額や社会保障の整備のために財政課との協議が重ねられ改善された。ま

た、意識改革においては、行政と現場が共通認識の上に進められる体制を組むために、月に2回、厚生員と支援室の定例会議が実施された。さらに、個々のスキルアップ及び現場の士気を高めるために、研修への参加も位置付けられた。常勤嘱託職員と短時間のパート職員、全員での研修会も開催され、中標津町児童館が向くべき方向が見えてきた。

私は、平成16年に補助指導員として児童館勤務を始め、平成18年から常勤嘱託職員となった。児童館改革が始まり、体制が整った状態で働きだした私は、当時の状況を改革によって変化したこととは知らず、それが児童館で出来る当たり前のことと認識していた。

第2章 児童館改革の下で取り組んだ実践と自己の成長

事例1 Aちゃんとの出会い～寄り添うこと～

私は、働き始めた当時、仕事は主に児童の遊び相手程度と考えていて、厚生員の役割や「健全育成」の意味や目的を考えることもなかった。厚生員になって最初に関わりを多く持ったのが、6年生のAちゃんだった。大半が低学年の中でAちゃんは目立つ存在だった。1年生から毎日のように来館していたAちゃんは、私には友達と遊ぶためというより、何かを埋めるように厚生員との関わりを求めているように感じられた。

中学生になった直後、来館しなくなったAちゃんが、中一の夏ごろから毎日のように来るようになった。本人と母親の話から不登校になったこと、学校での過ごしづらさと母親との関係に難しさを感じていることが分かった。

この頃のAちゃんは「私なんて…」ということが多く、私には自己肯定感がとても低いように感じられた。朝起きてダラダラして気が向いたら児童館に来る。私の腰に手をまわし、背後からくっつくのが彼女の定位置だった。そんな日常がしばらく続いた。私は彼女に何かしてあげたいけど何をしたら良いのかわからなかった。このままではダメだと考え、職員間でAちゃんとの関わり方を話し合い、児童館の手伝いを毎

日してもらうことにした。「どうしてやらなきゃいけないの？ 面倒くさい！」と文句を言いながらも、しっかりと手伝ってくれ、感謝の気持ちを伝えると満足げな顔をしていた。寄り添うことしかできない状況で、彼女を受け入れ認めることが私たちにできることだった。

私は毎日Aちゃんを見ながら、彼女が児童館にしか居られないことに不安を感じるようになった。疲れた時の逃げ場が必要な時もあるだろうけど、それが全てになることに迷いがあった。

ある日、Aちゃんの母親から電話が来た。家庭内でAちゃんが暴れているという。それまでの私は、厚生員が子どもの家庭の中にまで行くことはダメだと思っていた。しかし、この時は何かせすにはいられなかった。居ても立っても居られず、上司である前室長に電話で家庭訪問をしたいと伝えたが、「行くな」と言われた。しかし、あきらめきれず、様子を見て短時間で帰ってくることを約束し彼女のところに行った。私は、部屋で一人泣いていたAちゃんの横に座り、泣き止むまで肩を抱いていた。私にできることは、寄り添うことだった。

次第に、私はAちゃんと信頼関係を深めていくことができ、次のステップを考えることにした。そして、支援室に相談し不登校の学生が通うセンターに繋げることができた。Aちゃんの可能性を広げることができたと思えた。

その後、Aちゃんは地元の高校に進学し、なんとか卒業まで登校できた。成人した彼女に会った時、中学生の頃どんな気持ちで児童館に来ていたのか尋ねると「何も考えずに何となく行ける場所だった。“行かなきゃ”とか思わなくて良い場所だった。」と答えてくれた。もっと色々な理由を言うのかと思っていたが、それはとても単純な理由だった。子ども達が児童館に来る直接の理由は何であっても、児童館が子ども達にとって、どんな自分でも受け入れてもらえる安心な場所であることが大事だった。私たちが寄り添うことに徹した。Aちゃんと泣いて笑って過ごした時間は、私に児童館の存在意義を教えてくれた。

事例2 虐待事例との関わりから学んだこと

①Bちゃんとの出会い

Bちゃんは父親からの虐待から逃れて母親と中標津町に転入してきた。当時、すでに子育て支援虐待防止ネットワークが始動している中で、児童館での受け入れが決まった。私自身、この時はそのような組織があることは知っていたが、児童館がどのように関わるのかわからなかった。当時の私は、児童虐待はニュースの中の出来事であり、その問題の対応に自分が関わるイメージを持っていないままBちゃんに会うことになった。

初対面の時、Bちゃんは凍ったような瞳で私を見つめ、差し出した手は拒まれた。あの時のBちゃんの表情は今でも忘れられない。どんなふうに寄り添ったら良いのか、先の見えない不安しかなかった。

支援室に相談し、私が担当窓口となりマンツーマンの対応を始めた。Bちゃんに受け入れてもらうことはとても難しかったが、担当を固定し寄り添うことに徹したことで、徐々に信頼関係を築くことができた。Bちゃんは、私を受け入れていったが、それ以外の人は受け入れようとはしなかった。他の厚生員が近づくと「嫌い！ 離れろ！」と睨みつける。私とBちゃんの時間が増える分、児童館全体の体制が手薄になる。職員全員でそれをカバーし子ども達と関わりながら、チームとして児童館が動いた。Bちゃんにとって私が「安心できる人」になると、その場所が「安心できる場所」になり、そしてそこにいる人が「安心できる人」になっていった。その繰り返しのなかで、やがてBちゃんは他の厚生員も信頼できる大人として認識してくれ、児童館が彼女にとっての安全地帯となっていく。やっとスタートラインに立てた気がした。

②児童館だからできること

Bちゃんは、少しずつだが児童館では笑顔で過ごせるようになっていった。しかし、母親の精神的な不安定さもあって家庭環境の改善は難しかった。児童館と児童相談所が直接話をする機会があり、私はBちゃんのかかわりに不安

があることを話すことにした。その時、担当者の方が「児童相談所の職員は子ども達とずっと一緒に居られません。日々の生活で子どもと直接寄り添ってあげられるのは児童館のような場所です。地域にその場所があることで救われる子ども達はたくさんいます」と話してくれた。知識やスキルもなかった私にとって、この言葉は救いとなり、児童館の果たす役割の重要性を改めて実感することとなった。

③児童館だから見えること

中標津町の児童館では児童館に来館する子どもも児童クラブに在籍する子どもも日常的に保護者と会う機会がある。日常的に保護者と直接会えることは、児童館の利点といえる。迎える時、子どもの表情から親子関係や家庭の状況が把握できることも少なからずある。保護者が迎えに来たとたん子どもの表情がこわばり口数が減ることや、やんちゃだった子が別人のように大人しくなってしまうこともある。笑顔一つなく子どもの顔を見ず「早くしなさい。きちんとしなさい」と何度も言う保護者を見ると、仕事の忙しさに加えて、思うようにできない子育てに苛立ちを感じているようにも思う。親子にとって一日の疲れを癒す場所でもある家庭が、心が休まらない不安な場所になっているように感じることもある。子ども達が素の姿でいられる児童館だからこそ、私たちは子ども達のSOSサインにもいち早く気付き、どうしたらよいかを一緒に考えることができる。このような日々のやり取りが、虐待の早期発見や予防にもつながる。保護者の声に耳を傾け寄り添うことも私たちの重要な役割だ。「今まで誰にも相談できなかった。」と涙を流す母親もいる。親も子ども飾らない姿でいられる児童館だからこそ見えるものがある。

④児童館だけではできないこと～学校との連携～

虐待家庭との関わりの中で、難しさを感じることもあった。特に難しかったのが学校との連携だった。私が勤務し始めた当初、学校の児童館についての認知度は低く、私たちが直接学校に連絡しても、話を聞いてもらうこともできず

悔しい思いをした。絶対に連携が必要な機関なのにスムーズにいかない。子どもを守りたいという想いだけではどうにもならないことに直面した。その時は支援室に学校への説明を依頼し、管理職に児童館の役割を理解してもらうことによって、連携がとりやすくなった。児童館だけではできないこと、想いだけではできないことを実感し、それらを実現するためには地域の中で児童館の認知度を上げる努力をすることと、担当課との連携を図りながら丁寧に関係機関との協力体制を構築することの大切さを学んだ。

現在では、学校との協力体制がしっかりと組まれている。常に情報共有をし、連携がとれるようになった。児童クラブ入会時には、保護者に学校と児童館の連携を承諾してもらっている。このように、子どもの居場所である学校・家庭・児童館が繋がって子どもの成長を見守る体制がつけられてきたのも児童館改革の成果だと思う。

⑤「普通」という固定観念を捨てること

私自身はそれまで虐待はとても稀な“特別”なケースだと思っていた。しかし、この“特別”は稀なことではなかった。ある日、4年生男児が家に帰りたくないと言った児童館に来た。祖父母宅ならば帰れるということで送っていくことにした。虐待の心配もあったため、当時上司だった前室長にも一緒に行ってもらおうと、祖父母は玄関に出てこない。それどころか早く帰れといった感じだ。この状況に、「普通」はそんな態度をとらないだろう。「普通」玄関まで出てくるだろうと思った。送って一安心と思えるはずだったのにスッキリしない。帰り道、このことを前室長に伝えると「これが現実。私やあなたの『普通』がみんなの『普通』ではない。」と言われた。この時から私は、自分の「普通」という固定観念にとらわれないよう心がけるようになった。家族の在り方や子どもの成長等、個々の様子を客観的に捉え「私の普通」という狭い世界ではなく広い視野と多様な関わり方を考えることで、子ども達の未来の可能性が広がると考えるようになれたきっかけだった。

⑥子育て総合支援センターが担う役割

当時私は、週3日の午前中は子育て総合支援センターで勤務していた。

業務の大半は、育児の話聞き母親に寄り添うことだった。ここには『こんにちは赤ちゃん事業』で訪問員が家庭訪問した後、来館する親子も多かった。私たちは、医師や保健師のような専門知識はないが、児童館での経験を生かして現実味のある言葉で子育ての不安を抱えている母親に寄り添うことができたように思う。母親にとって、友達でもなく親でもなく、また利害関係もない私たちのような存在は、程よい距離感で色々な話を気軽にできるようだ。

家族のサポート状況や母親の精神状態によって虐待に繋がることも考えられるケースに出会ったときには、支援室に相談し、支援体制を組むこともあった。また、育てづらさを感じていた子どもが障害を抱えていることがわかり、保健センターや児童デイサービスに繋げ、直接専門家に関わってもらえる体制を整えたケースもあった。このような一つ一つの関わりが虐待予防の役割を担っていたと思う。平成27年、子育て総合支援センターは閉館し、その役割は「みらいる」に統合されている。

第3章 新たな発展を生み出す試練 中標津町じどうかん祭り～挑戦すること～

中標津町では、昭和57年から毎年、「中標津町じどうかん祭り」を開催している。当初は、各児童館単位で行っていたが、平成15年（第25回）から、当時設立された町の文化会館全体を児童館と模して日ごろの遊びを展開する“おまつり広場”と1000人規模が収容可能な大ホールでの“ステージ発表”で構成される全館合同の祭りとなった。

運営は、各児童館の代表からなる「子ども実行委員会」と、地域のボランティアで組まれる「大人実行委員会」で組織されるが、祭りの中心はあくまでも子どもであり、大人はサポート役に徹する。実行委員会の会議には、子どもと大人が参加し、子ども達の「やりたい」を形に

していくのだ。子ども達は、赤ちゃんからお年寄りまで、みんなを楽しませたいという気持ちでおもてなしをする役割を担っている。

準備の過程では子どもも厚生員も一緒にアイデアを出し合っているいろいろ試行錯誤しながら作り上げる。ステージ発表では、各館が特色を出しながら演目を作り上げていくのだが、これが頭を悩ませる。特技も何もない私には苦しみだった。そんな中、テレビで偶然2本の縄を跳ぶ「ダブルダッチ」を見た。これなら男女共に興味をもって取り組めると思い、早速、次の日から子ども達に提案してみた。私は、ダブルダッチをしたことはなかったけれど、見様見真似でなんとかなるかと思ったが、想像通りには全然できなかった。1年目の発表は、8人の子ども達でステージに立ったが、転んだり引っかけたりとボロボロだった。4メートル以上あるトラロープを回して大人数で跳ぶことに挑戦してみるなど思いつくままに無茶苦茶にやってみた。それでも子ども達は楽しそうで、みんなが主役になれるような発表が出来た。運動が苦手な子ども障害のある子ども加わってくるようになり、日ごろの遊びの中でもダブルダッチが定着していった。しかしスキルには限界があった。そんな時、中標津町児童館が「平成28年度厚労省『遊びのプログラム』モデル事業」に選定され、事業の中で以前から繋がりがあった京都の大学のダブルダッチサークルを招くことができた。大学のない中標津町の子ども達にとって、ダブルダッチを教えてもらうことの喜びと同時に、親や教師などの身近な大人ではない存在がモデルとなり、具体的な将来を描く良い機会となった。最初は、大学生のパフォーマンスそのものに目を丸くして見つめていた子ども達だったが、大学生と一緒にステージに立つ姿は、一人一人が輝き自信に満ちた表情をしていた。その後、私たち厚生員のレベルをはるかに超えた技術を身につけた子ども達は、中高校生となっても指導者として小学生に関わり、発表の構成も一緒に考えてくれる頼もしい存在となっている。

手探りの中での行動だったが、ダブルダッチ

に取り組んだことは、私に大きな影響を与えた。悩むばかりで前に進めなかった私が、行動に移せたことで挑戦することへの自信がついた。それは、子ども達も同様だったように思う。自分の気持ちを表現できなかった子が学校で発言する場面が増えたと、担任から驚きと喜びの声も聞いた。子ども達と一緒に作り上げた経験は、共に成長することの楽しさを教えてくれた。

平成27年から3年間は『バスでめぐるじどうかん祭り』に挑戦した。それぞれの児童館を会場とし、貸切った6台のバスが町中を往来した。中標津町は公共交通機関が充実しておらず、バスに乗ることは日常ではなかった。祭り当日、バスに乗り遅れ泣く子もいれば、汗をかきながら遠くの児童館から走ってくる子ども達もいた。それを見守る地域の大人たち。気が付けば、祭りの参加者で町中が賑わいその光景は圧巻だった。この取り組みは、日ごろ関わりが少ない地域の人々にも児童館の存在をPRすることにも繋がった。

「壊す」ことから生まれるもの

祭りの規模は年々大きくなり、地域・中高校生・児童クラブ保護者のボランティア、実行委員スタッフと来場者を合わせると、毎年2000人を超える規模のイベントとなり、多くの町民から認知されるようになった。規模が大きくなるにつれて盛り上がる反面、イベントとしての形にとらわれ、迷うことも多く出てきた。構想を立てる中で「やりたいこと」よりも「できること」に偏ってしまう。「こうでなければならぬ」という概念に縛られ、自分自身が楽しむことを忘れてしまっていた。これは、祭りに限らず日々の活動でも感じるようになっていた。

それは、前室長が全国的に中標津町の児童館事業を発信する機会が増え、児童館活動が取り上げられるようになり、私が「当たり前」と思ってやってきたことは「特別」なことだったのだと知ったからだ。私自身、実際に何が出来ているのだろうかと思悩むことが増えてきた。そして、期待されることをできない自分が不安でならなかった。これまでの中標津町の児童館の歩みを

守ることを考えると、プレッシャーに押しつぶされそうになってしまう。今できていることは、前室長がいるからできることなのだろうかと思うと先が見えなくなる。本当は、子ども達と楽しいことをたくさんしたい。そんな時「やりたいことをするために、出来上がった物を壊す勇氣が必要だ。」と前室長に言われた。凝り固まった考えを解きほぐされたような感じがした。私たちは、常々「現場が力をつける」ことを教えられてきた。それは、どんな状況の中でも変わること恐れず、信念を貫き、子ども達のための居場所を守り続けるために必要な力だった。児童館だからこそできることを強みに、子ども達と一緒に私たち厚生員がわくわくしながら、もっと楽しいことを考えていきたいと思った。

第4章 「みらいる」を子育て支援の拠点施設に

中標津町に「児童センターを建てたい」という想い

平成23年、支援室からの声掛けにより、小学生の頃から児童館を利用していた“児童館っ子”だった中高校生が中心となり『中高校生児童館建設プロジェクトチーム』（以下、「中高生プロジェクトチーム」と略記）が結成された。メンバーは、じどうかん祭りスタッフとしても関わっていた学生たちだった。彼らは、イベントの時には力を発揮してくれていたが日常的には児童館に来ていなかった。それには、児童館のスペースや開館時間に問題があり、来館できないというのが現実だった。そんな学生たちが自分達の居場所が欲しいと動き出したのだ。それは、これまで児童館改革を推進してきた前室長と先輩方の「児童センターを建てたい」という熱い想いと繋がっていった。

しかし初めのころは、その想いと私の心には温度差があった。なぜ、そんなにも児童センター建設にこだわるのかがわからなかった。私なりに経験も増え、子どものことを考え目的をもって様々な活動をしてきた。遊び場の提供・留守家庭対策・虐待家庭の支援・障害児の受け入れ・

地域との関わり等、児童館の果たす役割を出来る限りやってきた。児童館の重要性を充分理解していたはずだと思っていた。しかし、当時は子どもの成長を繋がりとして考える子育て支援のあり方をイメージが出来ていなかったのだと思う。

中標津町児童センター「みらいる」建設

実際の建設に向けての動きは、平成23年10月、中高生プロジェクトチームのメンバー16名が話し合いを重ね、リーダーが町長に基本構想を提案したことから始まった。平成25年、地元材を活用した建築物を推進するための「森林整備加速化・林業再生事業補助金」を活用した児童センター建設が議会で決定した。この時すでに町が基本構想をもっていたのも大きく、「すぐにこれを建てていこう」となり、平成26年度、建設工事が始まった。さらに、子ども達の意見を推進するために、厚生員・支援室・建設課建築係による担当者チームが設けられた。

平成27年11月には、乳幼児スペースを含めた0歳から18歳までが利用できる中標津町児童センターがフルオープンした。愛称は小学生の公募により『みらいる』と決定した。私は、建設に携わる中で、学生が真剣に取り組む姿に接し、リアルな声を身近で聞き、先輩方の想いに触れながら様々なことを感じ、熱い想いの正体が少しずつ見えてきたような気がした。そして、この場に立ち会えたことはとても貴重な経験で、これからの子育て支援のあり方を考える良い機会となった。

「みらいる」への異動で見えたもの

平成28年2月、私は10年間勤務した西児童館から「みらいる」に異動した。最初は、子育て支援センターの役割と中高校生の居場所づくりをしながら、小学生との関わりがどのくらい出来るのか戸惑いがあった。しかし、待たなして時間は進み迷い立ち止まっている暇はなかった。自分が学び感じてきたものをフル活用しながら前進するのみだった。今まで、目の前のことに懸命に向き合ってきたが、「みらいる」で働き始めたことで違う景色が見えてきた。「み

らいる」は、0歳から18歳までの児童に加えて、その親や祖父母、地域のボランティアの方々など、全ての世代が集える場所となっていた。それが見えた時に、子どもの成長を“点”ではなく、成長過程が感じられる“線”でイメージすることが出来たような気がした。これが、前室長と先輩方の児童センターへの想いだったのだろうと気づかされた。ここに集う人々の理由は様々だった。遊具や本等の物を求めて、遊びを求めて、仲間を求めて、空間を求めて、職員とのかかわりを求めて…理由はなんだって良い。この場所にたくさんの人が集い、笑顔が広がる場所になっていく。そのために私たちは、中標津町児童館の強みを最大限に活かし、どんな時でも子ども達の味方であるために、寄り添うことにこだわり続けたいと思うようになった。

今、私は「みらいる」ならそれができると確信している。

おわりに

児童虐待・発達障害・いじめなど、子ども達が抱える問題は多く、子ども達の心を想像すると、胸が締め付けられる。こんな状況だからこそ、児童館は子ども達の笑顔を守るために、最後の砦として地域になければならないと思う。中標津町児童館の歩みは、前室長の「中標津町から不幸な子どもをつくらない・つくらせない」という想いが、たくさんの人を動かしたことから始まった。訳も分からずこの世界に入った私は、そのつくられた道の上を歩いてきただけかもしれない。何度も「どうしたら良いかわからない」に直面してきた。どんなに頑張っても、不安はなくなる。それでも、多くの出会いから少しずつ自ら歩む力をつけてこられたように思う。私は、子ども達と一緒に試行錯誤しながら、前を見て歩んでその道を充実させ、未来に繋がるものにする役割の一端を担えたのではないかと考えている。この先も迷うことがたくさんあるだろう。自分のしていることが正解なのかどうか不安を感じ、立ち止まることもあるかもしれない。それでも、これからも仲間た

ちと共に、子ども達の明るい未来のために、町内の児童館そして子どもたちが自ら名付けた「みらいる」とともに、自分たちの足で明日への歩みを止めずに、自らつくる道を進んでいきたいと思う。

※注1・2

『こころの手をつなごう！』高松絵里子、
平成20年数納賞受賞作